



ネパールの視覚障害者を支える会(NBSA)会報 第38号 2014年3月

NBSA : <http://NBSA.sakura.ne.jp/>

主な内容 : 国際障がい者の記念式典に参加 / 定例活動記録 / 藤井正子さんとネパールの懐かしい詩思 / 大矢さんはこう語る 家族と一緒に暮らすのが一番ですよ / えっ、空を飛べる坊さんがいる? / 想いでと感謝の辞



■写真左は祝賀会 ■右側はカトマンドウの街角でシュプレヒコールを挙げる女性たち

■ 2013年12月の定例活動報告

①オーディオライブラリ事業。トーキングブックの作成大快挙。

大学生用の教材のほか小説の音声化、12月はなんと8冊を達成しました。暖房設備のない室内で、湯たんぽを抱えての読み上げ作業です。毎年ながら厳しい環境での作業。スタッフ、そしてボランティアの方々本当にありがとうございました。

②点字マガジン 休刊中

人事不足です、現在点字タイピスト募集中。

■ その他の事業

2013年12月3日。国際障がい者の日記念式典に参加。

障がい者の平等の権利などを訴え、より多くの人々に理解を求める日です。

日本ではあえてこのような事をしなくてもよい、と考える人が多いので、取り立てデモ行進などしませんが、ネパールでは特に肢体に不自由な人々の間で重要視されているようです。私たちは、連帯の意味を兼ねてデモ行進に参加してきました。

2013年12月5日 国際ボランティアデー

本来、ボランティア精神の高揚を促す国連などのイベントですが、NBSAではすでにボランティアをしてくれている人たちの、労をねぎらう日にしています。ネパールにはいまだにボランティア精神などが発達していないので、何か手伝ったりすると労賃を請求する人が多いのですが、NBSAのボランティアは通常交通費だけしかお支払いしていません。そこで1年に1度だけでも労をねぎってもらおうと、軽いスナックパーティーをします。今年はまたいたって質素でしたが、ボランティアさん達への感謝の気持ちは、通じたように思えました。

■ 2014年1月の定例活動報告

①オーディオライブラリ事業とトーキングブックの作成

小説やエッセイ、学習書や軽いマガジン、NBSAは幅広いジャンルの書物を音声化します。音声朗読してくれるのは、ベテランのサビトリさん。それにたいいはアシスタントのボランティアが加わります。朗読を手がけてくれるのは90パーセント女性です。男子はなぜか恥ずかしそうです。なぜでしょうか？

②点字マガジン休刊中。

現在点字タイピスト募集中。よろしくお願ひします。

■その他: 2014年1月4日点字の創設者、ルイブレリュの誕生を祝う国際点字の日。カトマンドゥの障がい者センターで、点字早撃ちコンテストが開催されました。これも恒例の事業ですが、学生の点字離れが激しく参加者は、ほんの数名でした。お歳を召した方には少し寂しい現象だと思います。

■2014年2月の定例活動報告

毎度同じフレーズですが、私たちの主な仕事は主に学生の教科書の音読をしています。この音読と言うのは、見る代わりに音で聞いて理解する事を言います。音は聴力が弱い人などを除くと、私たちはすごいスピードで音をキャッチしています。一度ラジオなどをじっくり聴いて、音の世界のおもしろさを味わってみてください。その代わりにちんたらちんたら流れてくる音は、なんだかつまらなくなってきました。どうです、小学校一年生と6年生の、読むスピードを想像してみてください。音が一気に面白くなりますよ。NBSAは大学レベルの本を読むことが多いので、当然読み方がはやくなります。ボランティアさんの読み方の速さと正確さは、たいしたものです。どこかでチャンスがあれば、一度ごらんになってみてください。

ネパールの詩

翻訳者、藤井さんにお話を聞きました。長きに渡り、楽しく読ませていただきました。

懐かしい思い出

ドルガ ラール シュレスタ選詩集「遠い声」出版 顛末記 藤井 正子氏

カトマンドゥの日本語学校のボランティア講師として毎年ネパールに行くようになってから2年目の2001年、当時はタメルのゲストハウス「MY HOME」を常宿にしていた。ある日の夕方、部屋でくつろいでいるとゲストハウスのオーナーで日本語学校の校長でもあるスーマン氏が英語の詩集”TWISTS AND TURNS”を持ってきて、「よかったら読んでみて下さい」とのこと。聞けば彼のお父上・ドルガ・ラール・シュレスタ氏はよく知られたネパールの民族詩人で、国内はもとより海外でも翻訳版が出ているという(私は寡聞にして知らなかったのだが)。取りあえず数篇に目を通して、その日はそのまま寝てしまった。

次の日、「詩、どうでしたか？」と聞かれ、つい「いいですね」と言ったら、「じゃあ、この詩集を日本語に翻訳してください。日本の人たちにも是非ネパールの詩を知ってもらいたいのでは」とおっしゃる。ノーと言えない日本人の一人である私は、彼の人懐っこい笑顔と押しの強さの前に、気がついたらしっかり引き受けてしまっていた。後々翻訳の大変さに泣かされることになるとは知らずに。その時は、ここに泊まっている日本人客にドルガ氏の詩を紹介するために、中の数篇を訳してコピーして渡せばいいくらいに思ったのである。だが、スーマン氏は全部訳してほしいという。

日本に帰った私に、溜まっていた仕事や用事に加えて詩集の翻訳という大きな宿題がのしかかった。頼まれたものの仕事なのかボランティアなのか、それもはっきりしないまま、ともかくも辞書と首っ引きで英語で書かれた詩を1行1行日本語に直訳する作業にとりかかった。ネワール語で書かれたオリジナルの詩にはネワールの信仰、文化、社会、暮らしが息づいている。それがネパール人のティルタ ラジュ トウラダハール氏によって英訳され、そこからさらに私が日本語で表現するという、翻訳の限界を超えた無謀にも思える作業。そんなこと実際は出来ないのではないか、いや、してはいけないのではないか、私は一体何をやっているんだろうか・・・そう自問しつつ、ネパールの町や村、出会った人々を思い浮かべながら深夜の作業を続けた。そこに使われた英語のひと言に一番近い意味の日本語を辞書の中に探して、短い詩の1篇を訳すのに数日かかったこともある。

数か月後、直訳を終えたものの大学ノートに書き連ねた文章は詩の形とは程遠いもので、次の段階はこれを日本語の詩らしい文体にしていかなければならない。ドルガ氏の希望は日本の若い人にも分りやすいようにとのこと。これからの作業は日本語との格闘だ。詩の心に寄り添う日本語表現を模索して何度も何度も書き直す。英訳版のタイトル”TWISTS AND TURNS”も、考えた末、「遠い声」とし、ドルガ氏の見解を得た。

こうして1年が過ぎ、翌年の7月、数冊の訳詩ノートを抱えて3度目のネパールへ。日本語学校の夕方の授業を終えて夕食を済ませた後、同じ建物内のスーマン宅に行き、原詩と私の訳した日本語とをつき合わせる作業が始まった。それは全く奇妙な光景で、スーマン氏とミーラ夫人、そしてドルガ氏と私の4人が車座になり、原詩のネワール語と、その訳である英語と、さらにその訳である日本語の意味の整合性を確認し、さらに私が原詩の心情をより深く理解できるように詩のモチーフなどが英語や日本語で熱心に語られた。一晩で3篇くらいが精一杯で、ネパール滞在の3か月間毎晩のようにこの作業が続き、いろいろとチェックや訂正の入ったノートを、最終仕上げのために再び日本に持ち帰ったのである。

ここまでしながら、私はスーマン氏がこの日本語訳をどうするつもりなのか知らなかった。従ってこの膨大な労力が仕事なのか、それともボランティアだとされているのかも不明確なまま、いずれにせよ私の役目は日本語に訳し終わるまでと思っていた。それも甘かった。

結果を言えば、日本で自費出版した方がいい本ができるからと、制作、印刷、販売まで、全て「お願い」されてしまったのだ。それもお金の話抜きで。それでも心魂注いで訳したネパールの詩に愛着もあり、正直、本になって読んでもらえたら嬉しいとの思いがあったので、黙って引き受けた。

しかし現実は一筋縄ではなかった。名の知れた日本人の詩集でさえ全然売れない時代だ。関係者や友人にお願いしたり、関連するイベントで紹介してもらったり、神戸新聞で取り上げてもらったりなどできることは何でもやって、印刷会社への支払いができたところで

力尽き、それ以上不得意な販売活動を続ける気力を失った。

気がつけば、訳から編集、出版、販売までしっかりボランティアをしていた「遠い声」出版顛末記。それでもドルガ氏の詩は素晴らしいし、ネパールの民族詩人の詩集が初めて日本でデビューし、日本の方たちに多少なりとも彼の詩の世界に触れてもらえたことは、今となってはいい経験をさせて頂いたと思っている。いつの日か、誰か優秀な翻訳家がドルガ詩集の素晴らしい日本語訳を出してくれるのを待ちたい。

藤井正子さん 長い間様々なところで、協力いただき本当にありがとうございました。

大家さんはこう語る

—誰も出稼ぎに行きたくない、ネパーで仕事があれば家族と一緒に暮らせるじゃないか

私は、日本とネパールとの間でブリッジエンジニアリングという仕事をしています。簡単にいえば、日本で必要な図面を、ネパールで製図、作画してもらう仕事です。図面というと紙に描きこむイメージですが、すべてコンピュータを使います。一般にCAD(キャド)といいます。日本からの作図依頼も、出来上がり図面もすべてインターネットをつかって送り、また送り返します。

カトマンズの職場は、平均して20代の半ばの若者たちです。男女比もほぼ半々です。彼らはコンピュータの知識、とりわけCADの技術もありながら、ネパールの国内ではなかなかその技術に見合った就労先が見つからなかった人たちです。私たちのこの仕事は、外国に出稼ぎに行くことなく、自分の技術を生かせる仕事として、このビジネスを始めた時から脚光を浴びています。ときの在日ネパール大使館から発注元の一つである都市ガス会社のCADでの日本側の業務をご覧に来られたこともありました。

もちろん、CADが使えれば即仕事ができるわけではありません。日本とネパールの働き方の違いはもちろんですが、図面が日本語表記であること、次に建物の建築法の違いを理解する必要があります。たとえば日本の建物は、天井裏があり、床下にスペースがあります。そこを水道管とか電線、電話線、そしてガス管も時に這っています。ところがネパールの場合これがない。スラブというコンクリート板のみでこれに下からペンキを塗ったり吹き付けてこれが天井、上面は上塗りしたり、大理石版を貼り付けてこれが床。この違いを理解しないと図面は描けません。でもこちらは、写真などで説明すれば、若い皆は容易にクリアしてしまいます。日本語のほうはというと、用語一覧表を作ったり、パソコンの「手書きパレット」という機能をつかって、形を似せてなぞって、該当する漢字をえらびだすと、苦戦はしながらも頑張っています。中には本格的に日本語学習をはじめるメンバーもいて大変心強い限りです。次は、より高いレベルの図面を設計できるようになることをともにめざしています。タンカ絵の繊細な技能をもつネパールの文化は、緻密で正確な設計・製図をもとめる日本にとっても貴重なパートナーとなってゆくに違いありません。

(写真左)：職場内風景



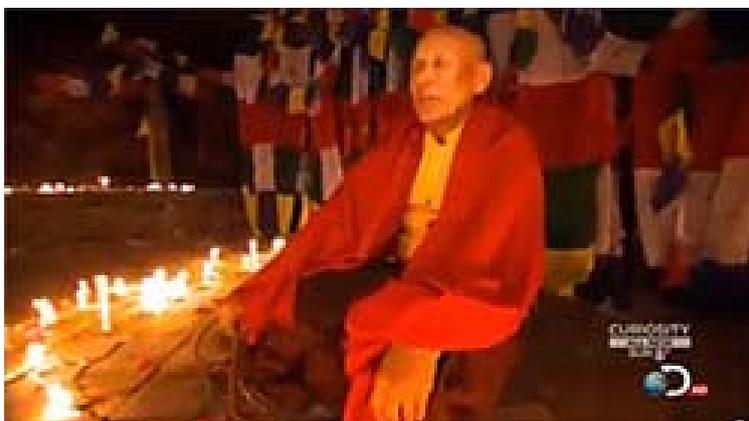
(写真右)：近所のレストランで昼食



えっ うっそ カトマンドゥに、空を飛べるお坊さんがいる!?

しかもタケコプターなしで?なぜだろう?みんなが大好き「オカルト」現象。仏教徒の聖地のひとつといわれる、カトマンドゥのボーダナート。そこの高僧が浮遊するという噂がある。これがその写真の一枚。とはいえ、よほど接近しないと見えないそうですが。話だけではいまいち想像がつきにくいと、このお坊さん一般公開してみました。どうやら、浮遊とまで言えないほどちょっぴりと、そのかわり長い間浮いて見せたとの事です。

このお坊さんが、火の輪の上に座っているから 空中遊泳しているように見えるのだろうか?
あのおびたしいローソクの下は何だろうか?
すごくリラックスしながら座っていらっしゃる。



やっぱりプロ!です

でっかいクラゲだっって見る人によっては、遊泳しているけどね~。

ついでに昔のヨーロッパのものを、披露させていただきます。
古今東西偉いお坊さんが空を飛んだ話は多々ある。たとえば大昔十字架にかけられ、処刑されたイエス様は、昇天された後にも顔見世に現われている。ふわりと現われ、しかも小さなエンゼルまで伴っている。そのかわいらしさは、少女マンガそのもの。



西洋には空を飛べる人間もいるみたいです。

新聞記者のクラーク・ケント(スーパーマン)でなくてもよかったです。

左のスケッチ、迫力あるな～。まるで走り高跳びで、無理してジャンプしたみたいです。体がよれよれしていますね。

イエス様の昇天は多数の画家によって、描かれているが、その脇役はエンゼル。少々お稚児趣味と言えない事もなく、妖しいのだが確かに餅肌。かわいいですよ。

キャラメルのパッケージになるほど愛らしい(年配者にしかわからないネタだったかな?)。ヒンドウの神様たちも、

この手のカラクリには長けている。空を飛べるし、化けることも得意。男性女性両性具有も多い。

次の機会にぜひインドにも行ってみよう。

こちらは浮遊に関係がないんですが、お釈迦様の誕生日に関する CNN の大変貴重なレポートです。お釈迦様の生誕地と伝えられるネパール南部ルンビニの発掘調査で、紀元前6



世紀のものともみられる木造仏教寺院の痕跡が見つかった。考古学会誌アンティクイティに紹介され、英ダラム大学などの研究チームが年の始めに発表した。

釈迦の生涯については主に口頭の伝承で伝えられ、物的証拠はこれまでほとんど見つかっていなかった。今回の発見は、釈迦の誕生時期を初めて考古学的に示すものと期待されている。

ポカラの思い出 渥美 資子 (あつみよりこ)

暑かった1年半のカンボジアでの仕事を終えて、このまま日本に帰るのもなんだかもったいない気がして、急に進路をネパールに変更した。その後何回もネパールを歩き来する事になって、実際始めにネパール入りしたのがいつだったかも定かではない。

ともかく、リゾートにはポカラが一番。誰に聞いても同じ答えが返ってきたので、目的地をポカラに決めた。残念ながら「地球の歩きかた」を持っていない。地図を見るとそこは、ヒマラヤの麓だった。

そこで私は、風光明媚のポカラで数日ぶらぶらしていたが、レイクサイドで買った古本にも飽きてきて、旅行者がすくない町外れを散策し始めた。であった場所は、とてつもなく広々したアマルシンハスクール。バックにヒマラヤ山脈のきれいな場所だけが一望できる。

こんな広々していてきれいなところで、どんな子供たちが勉強しているのだろうか。校門は開いている。ちょっとなかも見たくなった。月並みなユニホームを着た子供たち。菩提樹の葉がひらひらと舞っている。好奇心に駆られて、奥へ奥へと進んで行くと最後に簡素な門に突き当たった。

「おばさん、こっちから先はブラインドセクションだよ」ひとりの子が教えてくれた。「ブラインド？セクション？」これまで聞いたことのない言葉。ああ、盲学校のことか。名前は聞いたことがなかったが、ぜひ一度見せてほしいと思い、邪魔にならないように静かに門をくぐって行った。

とたんにハローの洪水。誰かが人の気配を感じたのだろう。子供たちが私を取り巻くってしまった。幸い授業の後だったようだ。制服を脱ぎ、のびのびした姿で、大きな菩提樹の下で子供たちが微笑んでいる。可愛いね！これが私と視力に障がいを持つ子供との出会いだった。

そのときの印象があまりに強く、私は1年余を置いて、再びネパールに向かった。このときは神戸の針灸の先生のご指導を受け、ネパールで展開をし始めた「レインボークラブ」の運営参加として参加した。しかしながら、残念にもこのクラブは神戸の方々の多大な努力と投資を無視されたように、私物化されそのまま放置されてしまう。

大使を抱いて渡航したネパールで、このままあっさり引くのはいやだ。2002年私は自力で「ネパールの視覚障がい者を支える会」を、カトマンドウの自宅を根拠地に立ち上げた。鹿児島と東京周辺を中心に会員や個人的な出資者を募り、ネパールの視覚障がい者を支える会は順調に発展を続けてきた。

また日本点字図書館の指導と寄贈による、点字誌月刊誌の発送は、ネパール初の点字誌として、今もこの名は誉れ高い。

カンボジアを經由して流れ着いた地ネパールは、はや15年あまりとなってしまった。そのエピソードは尽きることがないので次回に回すが、ネパールは私にとり第2の故郷となってしまったようです。

閉幕の言葉と御礼

十分に笑っていただけましたか？

それともノスタルジーに浸ってしまい、ぼろりときたでしょうか？ 何はともあれ私としては、会報誌も無事に書き上げることができました。13年余、NBSAのネットニュースや会報を読んでくださり、本当にありがとうございました。

会員の皆様、そして読者の方々には、特に心より御礼申し上げたい次第です。ほんの微力ではありましたが皆様の力添えを賜りまして、ネパールの視覚障がい者たちの学習効果が向上し、さらには人として求める娯楽なども充実させることも出来ました。

心よりお礼申し上げます。

今後とも皆様の健康、ご多幸をお祈り申し上げます。

ネパールの視覚障がい者を支える会 会長 渥美 資子

文責並びに NBSA 事業 最終窓口

郵便番号：352-0035

埼玉県新座市栗原1-13-7

渥美資子

電話番号：042-473-4662